

株式会社 ワーパス

57
LEADING COMPANY街の基盤を支える
インフラ整備のスペシャリスト資格取得を積極支援
環境調査にも注力

スマートフォンのような小さな精密機械から、飛行機やロボット、住宅、大型施設まで、あらゆる「モノ」をつくる際には設計図が欠かせない。そのうち、道路や河川、ダムなどの公共インフラの調査・設計を行うのが建設コンサルタントだ。《株式会社ワーパス》は、設計や測量に加え、騒音・土壌汚染・水質調査などの各種環境調査も実施。官公庁からコンサル業務一式を受注するだけでなく、大手民間会社の下請けとして環境調査のみも多く請け負っている。生西克徳社長(66)は、「うちは元請けと下請けの、二刀流」を実現している技術者集団。モチベーションの高い技術者たちが、街づくりを支えています」と語る。

創業当初は上下水道の設計を中心に、行なう下請け会社だったが、需要減少などを受け、元請けとして直接公共工事を受注できる会社を目指すようになった。技術力向上に力を入れ始めたのは、生西社長が入社した97年頃からだ。当時、価格だけで評価される入札制度への懸念が叫ばれ始め、公共工事の品質確保のため、設計の質や内容が評価される方式が各地で導入されていた。生西社長が社

内で初めて技術士の資格を取得。その後、社内の資格取得支援制度を充実させ、現在は技術士が5人いるほか、一級土木施工管理技士、測量士、RCCMなど難易度の高い資格保有者を多く抱える。「社員30人規模の会社としては非常に多いと思っています。手当が増え、できる仕事が増えるという点が社員のモチベーションになっているようです」

環境調査の需要の高まりにも早くから着目していた。設計業務に伴い現場に出向けば、河川や土壌の変化を目的に、調査の必要性を痛感。2014年には、土壌汚染対策調査法に基づく環境省の指定調査機関になるなど、積極的に環境調査分野を強化してきた。潜水士も7人抱え、水中での生物調査も得意分野だ。「SDGsの時代。環境調査部門はもっと伸びていくと考えています」と生西社長。今後は、経済安全保障の観点から農業分野での需要も高まると見て、アンテナを張っている。

建設コンサルタントは残業が多いイメージが強いが、ワーパスでは災害発生時を除けば月平均30時間程度。そこには、「視野の広い人間に育ててこそ一人前のエンジニア」という生西社長の思いがある。夢を抱き、技術力を高める若者たちが会社を成長へと率いている。



株式会社 ワーパス

事業内容

建設コンサルタント業（測量・環境調査・地質調査・土木設計など）

創業 昭和50（1975）年9月8日

代表者 代表取締役 生西 克徳

社員数 25名（男21名 女4名）

本社 鳥取県米子市米原8-2-23

電話 0859-31-1581

採用エリア（勤務地）

米子市

採用区分

新卒採用

キャリア採用

採用担当者からあなたへ

私たちは、豊かな自然環境を後世に残すための調査や社会活動に必要な社会インフラの測量設計に取り組んでいます。採用については、仕事に対する積極的な姿勢と職場における協調性を重視しています。さらに、資格取得へチャレンジする意欲のある人材を求めています。未経験でも、先輩社員が丁寧に指導しますよ！



総務課 課長
田中 満久さん

資料請求・お問い合わせ先

採用直通 TEL

0859-31-1581

採用直通 E-mail

info@wapuse.co.jp

公式サイトは
こちら



マテラスは
こちら



動画サイトは
こちら

各種調査を行って
より良い環境を守る

開発事業が環境に与える影響を調査するのが調査課の仕事。騒音や振動、大気汚染物質の調査から、地下水位や水質モニタリングなども実施している。河川工事の施工前に必要な生物調査では、オオサンショウウオやアカハライモリなどの絶滅危惧種の保護も担う。



土木事業と自然環境のマッチングを調査

山や森林、川や海、土の中など自然そのものを整備する土木事業では、元々の自然環境に何らかの影響を与える可能性が高い。有田さんは、河川工事の施工前に生物調査を行って絶滅危惧種を保護したり、ボーリングマシンを使って最深60メートルの土を採取して地質調査を行ったりしている。「1か所で20匹ものオオサンショウウオを保護したことも。地質調査では普段目に見えない部分を覗ける面白さがあります」と話す。生物調査の際は、現地状況を記した文献を調べた上、周辺を歩いたり、水の中に潜ったりすることも。「調査を誤ると

環境に大きな影響を与えかねません。気を引き締めています」

大学で土壌の研究などを行っていた神田さんは、「学んだことが生かせる」と職場に選んだ。「同じ土でも農学的な土と工学的な土は違うし、専門用語も多く大変ですが、新しいことを覚えるのは楽しいです」。先日はサウンディング試験での土質調査を実施し、想像以上に柔らかい土壌に驚き、改めて調査の重要性を実感した。「先輩たちの作業を見て、土の採取にも経験や技術が求められると知りました。少しずつ追いつきたいです」



調査課 調査課係長
神田 優香さん(22) 有田 秀草さん(34)

土木構造物設計には
正確な実測が不可欠

土木構造物の設計には、予定地の地形や高低差、距離を正確に実測し、図化することが必要だ。測量課は現地測量を行って精緻な現況図面を作成するほか、道路の幅や長さを決定するのに必要な交通量調査のデータ収集や、工事に伴う建物移転や補償の調査も担う。



道なき道を歩き、正確なデータを測る

道路やトンネル、ダムなどの公共インフラ事業では多くの場合、測量スタッフが真っ先に現地に入る。「まさに“道なき道”を山歩きして、データを取ります」と苦笑するのは平野さん。大抵は2人1組となってトランシットなどの測量機器を使って地形や勾配を測定したり、危険箇所のチェックを行ったりする。設計目線で測量する必要もあり、経験が求められる業務だ。1年目の光谷さんは、「1人がスタッフという長尺の定規を持って測りたい位置に立つんですが、木などが邪魔になり、適切な位置を判断するのが難しい」とため息を漏らす。そ

の分、苦労して測量したデータが形のある図面となった時の達成感はひとしおだ。

街中で測量業務を行う作業員の姿を見て、興味を覚えた平野さん。3年前、合格率10%前後の難しい測量士試験をパスし、現在は用地買収の際に必要な補償業務管理士の資格取得を目指している。「手当をもらえる上、仕事の幅が広がりますから」。そんな先輩の姿は光谷さんにまぶしく映る。「精度の高い測量を目指すとともに、まずは測量士補の資格を取り、技術者としての第一歩を踏み出したんです」と抱負を語る。



測量課 測量課主任
光谷 友希さん(18) 平野 翔哉さん(27)

計画や図面を作成
現地調査も行う

設計課では、道路、橋、公園、ダムなどのインフラ施設の設計を行う。CADを使った図面作成や、専用ソフトを駆使した設計計画・構造計算、汎用ソフトによる数量計算や報告書作成などのほか、現地調査や関係者らとの打ち合わせなど社外に出向くことも少なくない。



綿密な計算と調査を経て、構造物のレシピを作る

ワーパスには、異業種からの転職組も少なくない。半導体装置メーカーの技術者だった北村さんは帰郷を機に就職。「地元の役に立つ仕事を考えた時、建設コンサルタントの仕事を知りました」。林さんは、ヨガのインストラクターからの転職だ。「将来的に体力面などに不安があって。計算に基づいて構造物を造るという業務は性に合っているようです」。大学は理工系学部で、機械設計の仕事の経験もあったことから、すぐになじんだという。

北村さんは現在、橋梁の点検・補修に伴う設計などを担当。「まず現場で状況を確認し、ひび割れ

などの異変を見つければ要因を調べます。同じように見える異変でも原因によって対応は変わるので、その見極めが難しいですね」と頭をかく。上司とともに治山ダム設計に携わった林さんは、工事用車両が通行する道路の設計を任せられた。「地権者の方々の要望を聞きながらルートを決め、図面にするのは大変でしたが、図面通りの道ができた時はうれしかったです」と笑顔を見せた。

今、北村さんは技術士、林さんは技術士補の資格取得を目指している。「スキルアップを続けていきたいですね」



設計課 設計課
北村 凌雅さん(28) 林 薫里さん(30)